

3 将来の都市構造

(1) 都市地域の現状

本県の都市は、地形的・歴史的背景から海岸部や内陸部の限られた平坦地に分散して発展し、それぞれが独立性の高い都市環境を形成してきました。近年では、道路網の発達などにより都市間の交流が深まり、近隣都市間の機能連携や役割分担が進み、特に、別府湾岸や県北地域では市街地が連担し、相互の土地利用についても関係が緊密になってきています。

県土を鳥瞰的な目で見てみると、本県を縦断する東九州自動車道、横断する大分自動車道を骨格として、中九州横断道路や中津日田道路の整備も進んでおり、高速交通ネットワークが形成されつつあります。公共交通としては、鉄道はJR3路線、都市間をつなぐバスは高速バスや大分空港バス等が運行し、地域内は網羅的にバス路線網が構築されています。さらに、本県は、九州と本州・四国との間を結ぶフェリーの約8割が発着しており、「九州の東の玄関口」となっています。

これらの交通ネットワークにより、県全土の中核となり都市機能が集積している大分市・別府市、地方の拠点となる中津市・日田市・豊後大野市・佐伯市を有機的につなぐネットワークが構築されています。

また、ネットワークで連携している都市の周辺は、宇佐市や日田市に見られる豊かな田園や、久住高原や耶馬溪などに代表される山の自然、日豊海岸に代表される海の自然など、豊かで広大な自然環境が広がっています。

(2) 多極ネットワーク型の都市構造の形成

今後は、都市それぞれが整序ある都市環境の形成を図り、生活利便性や快適性の向上に努めるとともに、都市としての魅力をより一層高めていくため、県土全体の観点から都市圏を形成・充実していくことが必要です。

本県では、大分・別府に都市機能が集積しており、他市町においてもこの都市機能の利便性を享受することができるほか、都市圏内で都市機能の連携・分担を図るなど、県土全体で機能的・効率的な都市構造を構築することとします。このため、本県の将来の都市構造は、大分・別府を中核的な拠点としつつ、各都市においても拠点を配置し、これらを連携する「多極ネットワーク型」の都市構造を形成するとともに、拠点と地域や集落を結ぶネットワーク・コミュニティの構築を図ります。

具体的には、東九州自動車道、大分自動車道、中九州横断道路などの高速交通ネットワークを軸とし、これら軸上に位置する各都市について、まちづくり、都市の役割分担を、県土全体を見渡す視点から検討します。これと同時に、各都市周辺の田園環境、分散する都市の間に存在する広大な自然環境の活用・保全についても検討します。

また、この検討は、広域都市圏、連携都市圏という2種類の交流・連携の考え方、5つの都市圏設定に基づいて行います。

① 広域都市圏

広域都市圏では、その都市の立地状況・連担性から、一体的な都市の形成を目指し、土地利用、都市機能、景観等を都市圏内で総合的に検討します。

ア) 別府湾広域都市圏

別府湾岸に位置する、大分市、別府市、日出町、杵築市と、これと連担する由布市、国東市で形成します。

県土全体の中核となる拠点として大分を、圏域の核となる拠点として別府及び空港に直結する国東を配置し、別府湾岸部にかけて都市軸を形成します。県土の都市機能の中心、国際交流の玄関口としての役割を担う一体的な都市域の形成を検討します。

イ) 県北広域都市圏

周防灘沿岸部に位置する中津市、宇佐市、豊後高田市で形成します。

圏域の拠点として中津を配置し、周防灘沿岸部にかけて都市軸を形成します。各地方の歴史的・文化的特性を活かしながら、一体的な都市域の形成と田園環境との共生を検討します。

② 連携都市圏

連携都市圏とは、その都市の立地状況から、高速交通ネットワークを交流軸とした効率的な都市機能分担を目指し、土地利用、景観等については、各都市での独自性を重視して検討します。

ア) 県南連携都市圏

豊後水道に面する臼杵市、津久見市、佐伯市で形成します。

圏域の拠点として佐伯を配置し、東九州自動車道を交流軸とした都市機能の連携を検討します。

イ) 豊後大野竹田連携都市圏

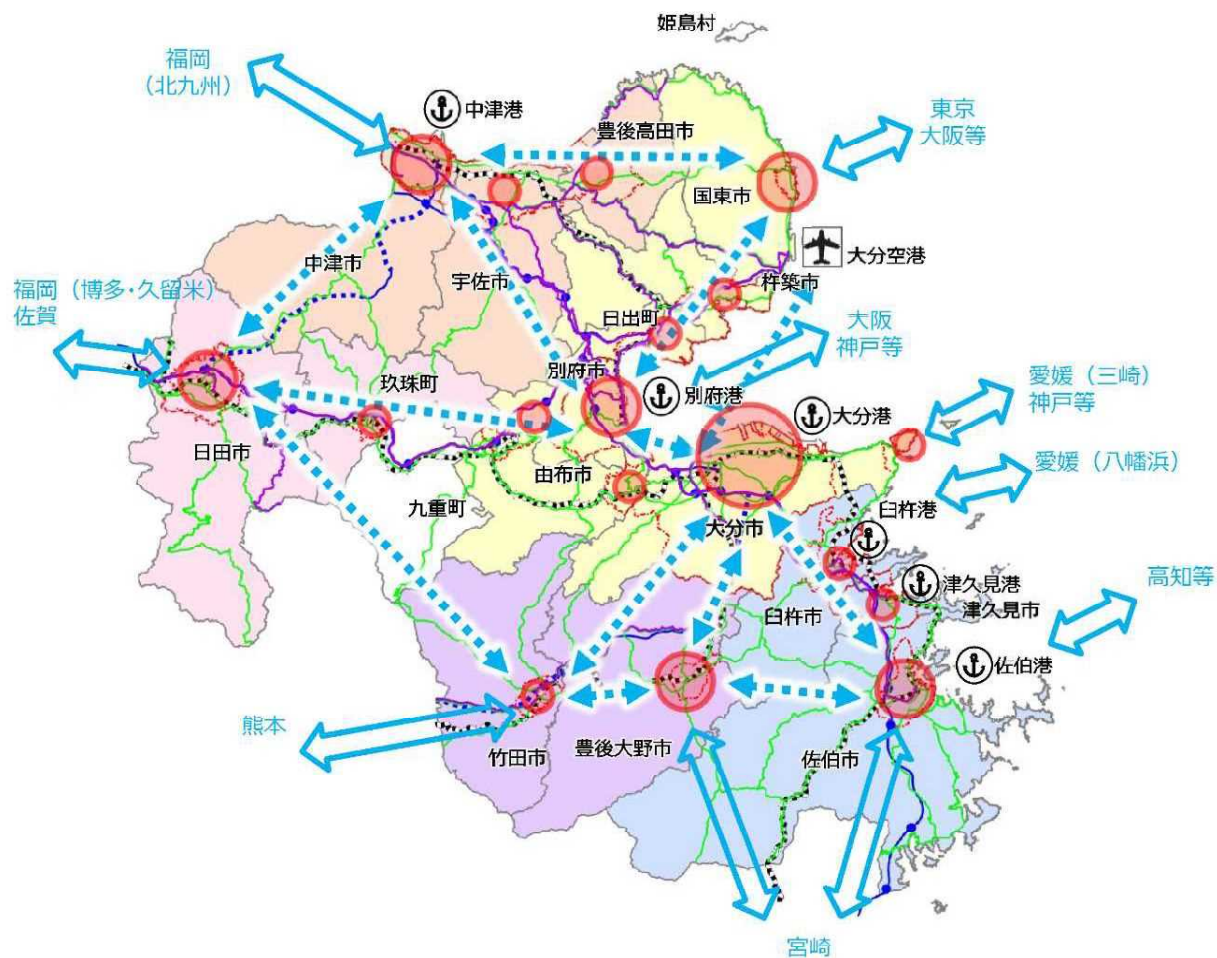
大野川流域山間部に位置する豊後大野市(三重町)、竹田市で形成します。

圏域の拠点として三重を配置し、中九州横断道路を交流軸とした都市機能の連携を検討します。

ウ) 日田玖珠連携都市圏

県西側の中山間部に位置する日田市、玖珠町で形成します。

圏域の拠点として日田を配置し、大分自動車道を交流軸とした都市機能の連携を検討します。



■将来都市構造図